慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	甘露寺縁起考
Sub Title	The origin of Ganlusi
Author	吉永, 壮介(Yoshinaga, Sosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.88, (2005. 6) ,p.60- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00880001-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

甘露寺縁起考

吉永　壮介

戦乱の中を転々としていた劉備は、江東に割拠する孫権と連合することによって、赤壁の戦勝を得た。曹操の天下統一の事業にひとまず楔を打ち込み、活路を見いだすことができた孫劉の両陣営であったが、赤壁戦後は荊州の領有を巡ってせめぎ合いを繰り広げることになる。『三国志演義』（嘉靖本巻一一第八則、葉逢春本巻五第一二則）はその緊迫感に脚色を加え、孫権が婚姻にかこつけて劉備を亡き者にせんとする甘露寺の謀略の顛末に仕立て上げた。

鎮江市北固山に鎮座する甘露寺には、劉備と孫権が対曹操の戦略を語ったという狠石（很石）、その二人が大望成就の念を込めて斬りつけたという試剣石、孫権の妹君である孫夫人が化粧をしたという多景楼、そして劉備が薨じた時に孫夫人が身を投げたとされる祭江亭等、三国志の物語に由来する古跡が多いが、その真贋に関しては古来議論が絶えない。南宋・陸游『入蜀記』巻一に、甘露寺を訪れた際の次のような一節がある。

狠石があり、漢の昭烈帝（劉備）と呉の大帝（孫権）が嘗て此の石に拠って共に曹氏を討つ謀を巡らせたと伝えら

れる。その石はなくなって久しいが、なくなるたびに寺僧はまた別の石を持って来てあてがっている。遊覧客たちが石を撫でては賛嘆しているのを、僧侶や童子たちは竊(ひそ)かにわらっているのだ。李文饒（李徳裕）の祠を参拝し、多景楼に登ったが、この楼閣もまた故址ではない。(1)

南宋前期には、甘露寺が三国志の物語と結びついて語られていたこと、そしてその史跡群が実は後代に附会されたものであると知る者もいたことが分かる。後代、甘露寺の創建された時期についても三国時代であるとする説が浮上し、一定の信憑性を得て諸書にも記されるようになった。本稿では、甘露寺建立の縁起と、後代に詩詞の典故とされた故事を確認したうえで、甘露寺が三国時代に創建されたという説の来歴をたどりたい。

一、李徳裕と甘露寺縁起

甘露寺は、唐・李徳裕（七八七―八四九）の創建とされる。穆宗の信任を受けて政界に重きをなし、後に牛僧孺と牛李の党争を繰り広げ、激しい褒貶の果ての最晩年、崖州に左遷されてその地で生涯を閉じた。その事績は『新唐書』巻一八〇、『旧唐書』巻一七四に見えるが、甘露寺建立に関する記述は見られない。甘露寺建立については、北宋・王存『元豊九域志』巻五に次のように見える。

甘露寺は、前方は北固山と向かいあい、後方は大江（長江）に臨んでいる。唐の宝暦年間（八二五―八二七）に李徳裕が建立した時、甘露が降ったので甘露寺と名付けられた。(2)

『元豊九域志』の記述は、南宋『内簡尺牘編注』巻四注にも引かれ、『資治通鑑』巻二五九の胡三省注に見える甘露寺縁起も、明記こそしていないが、字句に大きな異同が無いことから『元豊九域志』を引いているとみてよいだろう。南宋の施元之・施宿父子が蘇軾「甘露寺」詩に附した注は、『元豊九域志』ではなく『潤州図経』を引くが、李徳裕の創建とする点は同じである。また、南宋・史彌堅『嘉定鎮江志』巻八は、『元豊九域志』と同様の縁起を記した後で、李徳裕「甘露寺重瘞舎利記」に基づいて、「甘露寺を建立したのは、彼の仕えた穆宗の冥福を祈ってのことである」と書き添えており、南宋・王十朋『東坡詩集註』巻二三注引『致約図経』も同様に記す(3)。

李徳裕の甘露寺建立は宝暦年間なので、それより約十年前に李徳裕の父・李吉甫によって上梓された地理書『元和郡県図志』に甘露寺の名が見えないのも当然である。かくて、甘露寺縁起に関する記述は、地理書としては北宋の『元豊九域志』の出現を待たねばならないが、唐・馮翊『桂苑叢談』には李徳裕と甘露寺にまつわる逸話が収められている。その逸話は、後に簡略化して再構成され、『太平広記』巻二三二「甘露僧」におさめられており、概略は次のようである。

唐代、潤州甘露寺に、高潔孤高で高名な僧侶がおり、李衛公（李徳裕）も交友を結んでいた。李徳裕は解任されるにあたって、方竹で作った杖を一枝贈り物とした。その方竹は大宛国で産したもので、堅く角張っていて風格があり、李徳裕が宝物としているものであった。後に李徳裕が再び赴任して来た時、「以前差し上げた竹杖は、恙（つつが）なきや否や」と尋ねると、僧侶は「角を取って丸くして、漆を塗ってしまいました」と対（こた）えた。李徳裕は幾日も嘆き残

念がっていた。[4]

風雅の機微を伝える方竹杖の逸話は、唐代、甘露寺と李徳裕が近しいところで語られていたことを伝えてくれる。『桂苑叢談』に端を発し、『太平広記』によって広く知られたこの故事は、後代の類書等に広く採録されている。[5]

また、甘露寺境内に現存する鉄塔も、李徳裕にちなんだものとして知られる。[6]もともと李徳裕が建てたのは石塔であったが、後に倒壊して、北宋・熙寧年間に鉄塔が再建された。鉄塔は宋代、明代にも度々倒壊し、清代にはイギリス軍の破壊や落雷等、幾多の毀損を被りつつも、現在に伝わったものである。[7]

二、李徳裕以外の甘露寺にまつわる逸話

甘露寺と李徳裕の繋がりは後世広く知られたが、甘露寺のある北固山には、李徳裕以外にも語り継がれる逸話がいくつかある。李徳裕の甘露寺建立から遡ること二世紀半余り、大同十年（五四四）、南朝梁の武帝・蕭衍が「北固」を「北顧」に改めたと、『梁書』巻三「武帝下」に見える。[8]北固山は長江を擁する天険の要衝であり、そこから北方の地を見据える南朝の皇帝の姿が彷彿とする。また梁・武帝は、鉄鏁を鋳造したとも言われる。その鉄鏁は蘇軾「甘露寺」詩にも詠われており、南宋の施元之・施宿注は『潤州類集』を引いて梁の天監年間の鋳造、清・査慎行注は『名勝志』を引いて梁の天監十八年（五一九）の鋳造とする。[9]

甘露寺には南宋・呉琚の筆になるという「天下第一江山」の扁額があるが、それもともとは梁・武帝が書いたものであったとも言われる。[10]『三国志演義』に於ける劉備の「これこそ天下第一の江山である」という感嘆も、この扁額の語に

ちなんだものである。[11]

甘露寺にはまた南朝宋・陸探微の画も伝わり、蘇軾が「師子屏風賛」と「甘露寺」詩の序で触れたことにより、広く後世に知られたようである。

こうした史実に基づいたであろう故事とは別に、北宋初・徐鉉『稽神録』巻一には道士・范可保の逸話が見え、その概要は次のようである。

> 道士・范可保が甘露寺の北軒に登ろうとすると、古びて貧素な衣服を纏った者と裾が触れあった。その男は、急に黄色い犬を牽いて来て、それがまた范可保に触れた。平素から綺麗好きであった范可保が色をなして怒ると、貧素な衣服の者は、振り返って目を見開いた。その目の輝きは雷（いなずま）のようであり、范可保は畏れを抱いた。しばらくして、山の下からやって来た者が、「さきほど山上で霹靂が龍を捕えたのだが、あなたはこれを聞きましたか？」と尋ねたが、范可保は固より知らなかった。[12]

范可保のこの逸話は『太平広記』巻三九五や『佩文韻府』巻六三之一九にも引かれているが、さほど文墨の徒にとっての好題とはならなかったようである。[13]

三、甘露寺と三国志の物語との関連について

（一）唐代まで

北固山と甘露寺は、李徳裕、梁・武帝、陸探微の故事を持ち、「天下第一江山」の名にし負う景勝の地として、唐代にはすでに多くの詩人の筆下に描かれていた。しかし『三国志演義』に見られるような物語とは、ほぼ無縁であった。以下、いつ頃から甘露寺が三国志の物語の史跡として意識されだしたのか、概観してみたい。

唐代、三国志がすでに物語としての萌芽を見せていたことの証左に、しばしば李商隠「驕児詩」が挙げられるが、ほかにも相当数の詩人が三国志にまつわる詩を残している。それらの中には、発展的に後世の『三国志演義』へと継承された題材もある。(14)

甘露寺と三国志の物語とが重なることを示す最も初期の詩としては、これもしばしば例にあげられる羅隠の詩「題潤州妙善前石羊」があり、「紫髯桑蓋此に沈吟す、很石猶存す事尋ぬ可し」の句が見える。(15)紫髯とは孫権、桑蓋とは劉備のことであり、唐代には既に劉備と孫権が如何に曹操に対抗するかを論じたという狠石、すなわち羊の形をした石の伝説があったことが分かる。羅隠は「銭塘遇黙師憶潤州舊遊」詩でも石羊に触れている。

しかし、唐代にはまだ、甘露寺の名と三国志の物語は、必ずしも一体化していない。『全唐詩』を見渡すと、羅隠には前述の二つの詩のほかに、「甘露寺火後」「(潤州)甘露寺看雪上周相公」があり、また甘露寺の名ではないが「北固亭東望寄黙師」と題する詩もあるが、いずれも三国志の物語には触れていない。羅隠のほかにも、張祜、杜牧、許渾、陸亀蒙、盧肇、許棠、周朴、周繇、張喬、楊夔、孫魴、曹松、徐鉉等が甘露寺の風景のもと筆墨を潤しているが、三国志の物語と結びつけている例は見えないようである。例えば杜牧は、多くの詩中で三国の風雲を懐古しており、「赤壁」詩(16)では、曹操の銅雀台と二喬を繋げるという、後の『三国志演義』に連なる詞藻を見せるが、「寄題甘露寺北軒」詩で

は、甘露寺を題にとりながら、全く三国志の物語には触れていない。甘露寺のある潤州出身の許渾も、「南陽道中」詩等で三国志への興味を見せているが、甘露寺を題にとった「歳首懐甘露寺自省上人」「甘露寺感事貽同志」「送無夢道人先帰甘露寺」の三篇の詩では、いずれも三国志の物語に結びつけていない。あるいは、杜牧（八〇三―八五二）や許渾（生没年不詳、太和六年（八三二）進士及第[17]）に比べて、羅隠（八三三―九〇九）の活躍した時期はやや遅く、その間にも着々と甘露寺にまつわる新しい伝説も形成されつつあったのであろう。

（二）北宋以後～狠石と三賢亭について

北宋初期も、甘露寺と三国志の物語の関係はそれほど密接ではなかったようである。『太平寰宇記』巻八九は、「城上の角土山上に在り、下は大江に臨みて晴明、軒檻上から揚州を見る詩人たちが多く題に取っている」と記すのみである[18]。『元豊九域志』巻五も李徳裕による縁起を記すのみで、三国志の物語には触れておらず、『太平広記』も前述の如く李徳裕と范可保の逸話を載せるのみである。

しかしその陰で、甘露寺に於ける三国志の物語は確実に受け継がれ、形成されていった。蘇軾「甘露寺」詩の序に云う、

> 寺には羊のような形をした石があり、「狠石」と呼ばれ、諸葛孔明がその上に座り、如何に曹操を打ち破るか、孫権と論じたのだという[19]。

蘇軾は続けて梁・武帝、陸探微、李徳裕の故事に触れており、この文章は後代諸書の広く引くところとなった[20]。

また蘇軾『東坡志林』巻一「懐古」の「廣武嘆」に云う、

私は潤州甘露寺に孔明、孫権、梁の武帝、李徳裕の遺跡があるのを聞き、それに感じ入って詩を賦した、云々[21]

狠石あるいは石羊は、すでに梁・武帝、李徳裕と並ぶ甘露寺の史跡とみなされていたことが分かる。

これらの蘇軾の感興は、甘露寺と狠石の伝説を広める大きな一翼を担ったことであろう。まず蘇軾の弟・蘇轍が蘇軾の「甘露寺」詩に応えて「次韻子瞻遊甘露寺」の詩を賦し、「孔明坐する所の石」と詠ったのを皮切りに[22]、張耒「感遇二十五首　其三」、南宋初の程俱「北固懐古」、姜夔「永遇楽　次稼軒北固楼詞韻」等、狠石の伝承はすでに甘露寺と一体化しつつあり[23]、それが蘇軾の筆に勢いを借りて、一時に噴出したかのような感がある。

ところで、唐末から形成されたであろう狠石の伝承には、劉備と孫権が論じたとするものと、諸葛亮と孫権が論じたとするものとがある。その系譜については、角谷聰氏が詳細に論じており、「元々孫権と劉備の二人が曹操を討つ相談をする、という内容であったが、やがては孫権と諸葛亮の二人が曹操を討つ相談をするものへと変化しており、また話を行った主体、即ち「甘露寺説話」において中心的役割を担う人物についても、孫権から諸葛亮へと移行している」と指摘している[24]。ここでは以下に概略のみを述べ、若干の考察を加えるにとどめたい。

唐・羅隠「題潤州妙善前石羊」では劉備と孫権が語り合ったことになっていた。南宋『漁隠叢話』前集巻二四「羅隠」の項、南宋末『輿地紀勝』巻七「狠石」の項は、いずれも蔡寛夫『詩話』を引いて、「潤州甘露寺には伏せた羊のような形をした石塊があり、狠石と呼ばれている。孫権が嘗てその上に乗り、先主（劉備）と曹操への対抗策を論じた」と

述べ、[25]続けて羅隠の詩を引いている。本稿冒頭に挙げた陸游『入蜀記』の甘露寺紀行も、この系譜上にある。

ちなみに、蘇軾「甘露寺」詩の施元之・施宿注は『輿地志』を引き、「石羊巷は城南にある。呉の時代、孫氏の隧道であった。劉備が孫権のもとに詣り、孫権とともに狩りをし、酔ってそれぞれが羊の形をした石に拠った」と述べる。[26]『輿地紀勝』巻七「石羊巷」の項も『輿地記』を引き、同様の解説を附している。もしこれらの引用が確かに顧野王『輿地志』からのものであるならば、「石の羊にまたがる劉備と孫権」というモチーフは、一気に南朝陳の時代にまでその源を遡ることになる。[27]

これら劉備と孫権が狠石で語ったという系譜の一方で、蘇軾は「甘露寺」詩と「廣武嘆」に於いて、孔明と孫権、という取り合わせを繰り返し述べており、既にその取り合わせが定着していたであろうことも窺わせる。さらに明・滕謐の手になる「很石記」の如く、諸葛亮が赤壁の戦いに備えての謀略を狠石上でめぐらせた、という筋書きを持つものも現れた。[28]

このほか、極端な異説もある。北宋・劉斧『青瑣高議』前集巻之九「詩淵清格」に云う、

> 潤州甘露寺には三賢亭がある。すなわち劉備、孫権、曹操がまだ身分が低かった頃、此処に会したのである。[29]

恐るべき荒唐無稽な伝承ではあるが、この話は南宋『内簡尺牘』巻一、『詩話総亀』巻一六に『青瑣集』として引かれている。但し、この「三賢亭」は劉備と孫権が会するという伝承の本流から派生したものではないと思われる。というのも、甘露寺の創建者である李徳裕には「北固懐古」という詩があり、その中で畢構、陸象先、斉澣の三人の名を挙

げて「三賢」と称しており[30]、元来の「三賢亭」は、李徳裕が詩中で称賛したこの三人が祀られていたと考えるのが順当であろう。また、『北固山志』巻二「三賢祠」の項には「唐李徳裕、宋蘇軾、米芾」と見え、同じく巻二「明三賢祠」には「龐時雍、趙昌期、楊通金」の名が見える。恐らく「三賢亭」は時代に応じて様々に崇められ、柔軟且つ時には貪欲に三国志の英雄まで取り込みつつ、名勝甘露寺の一角を為し続けていたのであろう。その意味では、『青瑣高議』の「三賢亭」は、真の創建者である李徳裕と、後に附会された三国志の物語とが期せずして融合した、甘露寺縁起の徒花（あだばな）の一つであると言える。

以上概観してきたように、狠石伝説の形成は、細部においては境界線が混沌としている箇所も多い。しかしそのことから、甘露寺にまつわる三国志の物語が、北宋の時期から大きな膨らみをもって展開したことが窺えよう[31]。

（三）多景楼について

北固山上の楼閣については、晋の蔡謨が建てたといわれるが[32]、北固楼の名が知られるようになるのは、梁・武帝が北固楼を北顧楼と改めたことが大きいであろう。北固楼と三国志の物語とを絡ませて詠ったものには、南宋・辛棄疾「南郷子」（登京口北固亭有懐）や姜夔「永遇楽」（次稼軒北固楼詞韻）、曹遠「南徐懐古呈呉履斎」等がある。

北固楼と並んで、宋代以後、多景楼の名も詩詞に多く見られるようになる。多景楼という名称については、李徳裕の「多景懸窓牖」詩からとったともいわれるが[33]、建てられた時期は定かではない。南宋・陳天麟「甘露寺重建多景楼記」に、「唐の李徳裕の時に寺が興されたが、それ以後北固山に登った者で多景楼を詩の題として詠んだ者がいないところを見ると、多景楼は本朝（宋代）に建てられたものであることは疑いない[34]」とあるのは、妥当な解釈であろう。ちなみ

に、時代が下って清『江南通志』巻三二には、「多景楼は丹徒県北固山上に在る。宋の太守・陳天麟が建てたもので、唐代の臨江亭の故址である」と見え[35]、『大清一統志』巻六二もこれを踏襲している。しかし、陳天麟は南宋の紹興十八年（一一四八）の進士であり[36]、それより一世紀ほど前の曾鞏や蘇軾たちの頃には既に多景楼の名で詩が詠まれていたことを考えれば、陳天麟はあくまでも「重建」であったと言うべきである。

狠石同様に、多景楼もまた甘露寺にとって欠かせないものとなったが、しかし、それはあくまでも、詩人たちの情感を震わせる「多景」の楼閣として詠われたのであり、「劉備に嫁いだ孫権の妹君が化粧をした」という伝承が芽生えた様子は見受けられない。多景楼を詩に詠んだ嚆矢は、曾鞏の「甘露寺多景楼」であろうか。次いで蘇軾の「潤州甘露寺弾箏」、米芾「題甘露寺」等、宋以降は枚挙に暇がないが、いずれも風景を詠ったものである。多景楼を三国志と絡めているものには、陸游「水調歌頭」（多景楼）、明・劉璟「甘露寺多景楼」、清・厲鶚「登甘露寺多景楼」等があるが、甘露寺本体が狠石を媒介として三国志の物語を涵養したのに比べると、多景楼と三国志の物語との繋がりは、はるかに新しく希薄なものであると言えるだろう。

四、三国呉の創建説について

甘露寺創建については、既に見たように『元豊九域志』『嘉定鎮江志』『方輿勝覧』『資治通鑑』胡注等はいずれも李徳裕の名を挙げ、その建立時に甘露が降ったという縁起を記している。甘露寺は狠石伝説を育みつつも、宋末元初まではあくまでも李徳裕の創建として認知されていたことが分かる。

その系譜に水をさすように、甘露寺を三国時代の創建としたのは、元・至順四年（元統元年、一三三三）に編纂され

た『至順鎮江志』であろう[37]。その巻九の注は『図志』を按じて曰く、

寺は三国時代の甘露年間に建てられ、唐の李徳裕の時代に土地を区画して址を辟いた[38]。

とあり、続けて宋代に再建された顛末が記されている。甘露寺創建の時期を、李徳裕より五百年以上も遡る三国呉に措定するというのは、地理書であることを考えれば突飛に過ぎるようにも思われるが、唐末から宋代にかけて流布した狠石伝説に加えて、北固山は孫権が一時期本拠地として鉄瓮城を築いたとされる土地であり[39]、さらに呉の最後の君主である孫皓の時代に「甘露」の年号（二六五―二六六）があったことで、条件が整ったと言えよう。

かくして狠石伝説のみならず、地理書に於いても甘露寺の縁起と三国志とが重ね合わせる説が現れた。しかし甘露寺の三国呉創建説はそれほど一般化しておらず、甘露寺を舞台とする三国志の物語も、元代にはまだ現在に伝わるような首尾を備えてはいなかった。元雑劇「隔江闘智」や『三国志平話』は孫劉婚姻のプロットをもつが、いずれもその舞台は甘露寺とはされていない[40]。

明代になると、徐々に三国呉の創建説が見られるようになる。明・王直（一四〇四年進士及第、一四五七年没）『抑菴集』後集巻五「甘露寺興造記」は、「呉主孫皓が寺を建てた時、甘露と改元され、それが名となった」とし[41]、続けて天監年間に梁・武帝から鉄鏟を賜ったこと、唐・宝暦中に李徳裕が拡充したことを書き添えている。少しく時代が下り、天順五年（一四六一）成立の『明一統志』巻一一「寺観甘露寺」の項では、「北固山上に在り、呉の甘露年間に建てられたため、その名がついた」と記した後[42]、梁・武帝の逸話に触れているが、李徳裕の創建には触れていない。こうして

見ると、甘露寺の三国呉創建説と、『三国志演義』に於いて甘露寺が舞台として取り上げられる土壌とが徐々に醸成されてゆく観がある。

その後、嘉靖年間（一五二二―一五六六）を挟み、『三国志演義』では孫劉婚姻の舞台として甘露寺の名が定着する。その影響とも相俟って、三国呉の創建説が受け入れられたことであろう。万暦二三年（一五九五）の序を有する明・彭大翼『山堂肆考』巻一七四、清・康熙四九年（一七一〇）の『淵鑑類函』巻三五三、康熙二三年（一六八四）編纂（一七三六年重修）の『江南通志』巻四五もこれに続く。それらの中には、実際には甘露年間は二年しかなかったにも関わらず、「甘露五年の建立」としているものもある。(43)

無論、全てが甘露寺建立を三国呉とするようになったわけではなく、曖昧に李徳裕の逸話も並べたり、呉の甘露年間というのは謬見であると指摘する書も多い。(44)たとえ呉の甘露年間に甘露寺が建立されていたとしても、劉備と孫権の会談はそれを半世紀以上も遡っており、『演義』の齟齬は覆うべくもないこと、既に多く指摘がなされてはいる。しかし明代以降は、それが謬見であると完全には払拭しきれぬ程度にまで、甘露寺縁起を呉と結びつける理解も浸透しつつあったと言えるだろう。

地理書の集大成ともいえる清・顧祖禹『読史方輿紀要』巻二五は、『太平寰宇記』に倣う『資治通鑑』胡注の記述、李徳裕が建てた時に甘露が降ったという『元豊九域志』の記述、三国呉の時代に寺を置き、後に李徳裕が拡張した、という『至順鎮江志』の記述を全て記している。『読史方輿紀要』は歴代の事蹟に対して、判断を下さずに網羅することを目的としているのであれば、その玉虫色の記述も非難するにはあたらないであろう。

五、結語

唐・李徳裕が建立した甘露寺は、狠石、多景楼、試剣石[45]等、様々な伝承を育みつつ、後代、三国呉の創建という新たな縁起が附会された[46]。その軌跡をたどると、唐末から宋にかけての狠石伝説を土壌として、元から明にかけて、三国呉の創建説と甘露寺での孫劉婚姻の故事がほぼ同時期に形成されている。三国呉の創建説は、狠石等の三国志の物語に触発されて生まれた新たな縁起であるが、同時にその新しい縁起自体も、『三国志演義』の孫劉婚姻の舞台に甘露寺を用意し、その名を挙げることに違和感を感じさせない役割を担ったことであろう。

尚、呉が甘露という年号に改元する契機となったのは蔣山陵に甘露の祥瑞があったことであるが、その蔣山の地名の由来も、後代変遷を経て地理書に記されるようになった形跡がある[47]。伝承が史実の体を為して地理書の中に居場所を得る例は多々あるが、古跡の由来自体が変遷するとき、その軌跡をたどることによって、各時代にどの伝承が御当地物としての価値、集客力を持っていたかが年輪のように窺えるのは興味深い。甘露寺の場合は、三国志の物語を培養し、それらを取り込むことによって、積極的に名勝としての価値を創造し続けてきたと言えるだろう。

注

（1）二十三日、至甘露寺、飯僧。甘露蓋北固山也。有狠石、世傳以為漢昭烈、呉大帝嘗据此石共謀曹氏。石亡已久、寺僧嘗輒取一石充數。游客摩挲太息、僧及童子輩往往竊笑也。拜李文饒祠、登多景樓、亦非故趾。（『陸游集』中華書局、一九七六年）

（2）甘露寺前對北固山、後枕大江。唐寶暦中、李徳裕建時、甘露降於此因以為名。（中華書局、一九八四年、並びに「四庫全書」）

（3）『嘉定鎮江志』巻八は「甘露寺在北固山。唐寶暦中、李徳裕建以資穆宗冥福」（「宋元地方志叢書」第五册）と記す。李徳裕「甘露寺重瘞舎利記」は『北固山志』巻二二に収められている。『施註蘇詩』巻四、『海録砕事』巻一三下、『黄氏日鈔』巻三九、『南軒集』巻一八等、南宋期の諸書が、李徳裕が穆宗の冥福を祈ったことに触れている。

（4）唐潤州甘露寺僧某者道行孤高。名重江左。李衛公徳裕廉問曰。常與之游。及罷任、以方竹杖一枝留贈焉。方竹出大宛國。堅實而正方。節眼鬚牙、四面對出。寔衛公之所寶也。及再鎮浙右、其僧尚在。公問曰、前所奉竹杖無恙否。僧對曰、已規圓而漆之矣。公嗟惋彌日。出桂苑叢談。（中華書局、一九六一年）このほか『太平広記』巻一七二も『桂苑叢談』の李徳裕の逸話を引いている。尚、『桂苑叢談』では、李徳裕は朱崖公と呼ばれる。

（5）『白孔六帖』巻一四、『類説』巻五二、『記纂淵海』巻九六、『剡録』巻九、『全芳備祖集』後集巻一六、『古今合璧事類備要』別集巻五四、外集五十、『珊瑚鉤詩話』巻二、『山堂肆考』巻一八一、『天中記』巻五三、『遵生八牋』巻一四、『淵鑑類函』巻三七八、『佩文斉広群譜』巻八五、『格致鏡原』巻五八、『佩文韻府』巻五二之二等に見える。

（6）米芾「潤州甘露寺」詩に見える。また、『京口三山志』（「中国方志叢書」）所収『北固山志』巻二には「鉄塔、即衛公塔。在後峯東。唐寶暦中、李徳裕建」と見える。

（7）『江蘇文物古迹通覧』（上海古籍出版社、二〇〇〇年）、一七五―一七六頁参照。

（8）己酉、幸京口城北固樓、改名北顧。（中華書局標点本）また、『建康実録』巻一七にも見える。

（9）王文誥輯註『蘇軾詩集』（中華書局、一九八二年）巻七「甘露寺」参照。

（10）呉琚については、『書録』巻下、『清河書畫舫』巻九下等に見える。また、『明一統志』巻一一「寺觀甘露寺」には、「内有梁武帝所書天下第一江山六字」と見え、『山堂肆考』巻一七四、『淵鑑類函』巻三五三もこれに倣う。

（11）此乃天下第一江山也。（『明弘治版三國志通俗演義』（嘉靖本）新文豊出版公司、『三國志通俗演義史傳』（葉逢春本）関西大学出版部）

（12）道士范可保、夏月獨遊浙西甘露寺。出殿後門、將登北軒、忽有人衣故褐衣、自其傍入、肩帔相拂。范素好潔、新衣恐汚、心不悦。俄而牽一黄犬、又摩肩而出。范怒形於色。褐衣回顧張目、其光如電、范始畏懼。頃之、山下人至、曰、「向者山

上霹靂取龍、子聞之乎?」范固不知也。（中華書局、一九九六年）

（13）范可保の名は、『続仙伝』巻下「聶師道」にも見える。

（14）唐代に於ける三国志の物語の形成については、李福清（B.Riftin）氏「唐代的三国故事」（『三国演義与民間文学伝統』上海古籍出版社、一九九七年）等、多くの先行研究がある。また、角谷聰氏が唐代に於ける三国志物語の生成をたどる試みを進めており、「「三国時代物語」の形成――両『唐書』における三国時代の人物――」（『中国学研究論集』第四号、一九九九年）、「「三国時代物語」の形成――『全唐詩』における三国時代の人物――」（同第五号、二〇〇〇年）、「「三国時代物語」の形成―唐代小説における三国時代の人物―」（同第六号、二〇〇〇年）等の論考がある。

（15）紫髯桑蓋此沈吟、很石猶存事可尋、漢鼎未安聊把手、楚醪雖滿肯同心、英雄已往時難問、苔蘚何知日漸深、還有市鄽沽酒家、雀喧鳩聚話蹄涔。（『全唐詩』巻六六二）但し、この詩及び後述の「錢塘遇默師憶潤州舊遊」詩で狠石に触れてはいるが、いずれも「甘露寺」という名自体は記されていない。

（16）『全唐詩』巻五二三。李商隠の作とも伝えられる。銅雀台説話に関しては、角谷聰氏「「三国志物語」の形成――「銅雀台故事」を中心に――」（『中国学研究論集』第十一号、二〇〇三年）等、参照。

（17）『唐才子伝』巻五、参照。

（18）甘露寺在城東角土山上、下臨大江晴明、軒檻上見揚州歷歷、詩人多留題。（文海出版社、一九九三年）

（19）欲遊甘露寺、有二客相過、遂與偕行。寺有石如羊、相傳謂之狠石、云諸葛孔明坐其上、與孫仲謀論曹公也。（南宋・王十朋『東坡詩集註』巻一、並びに『蘇軾詩集合注』上海古籍出版社、二〇〇一年）

（20）『錦繍萬花谷』前集巻五、『記纂淵海』巻六、『淵鑑類函』巻三五三等。

（21）其後余閒潤州甘露寺有孔明、孫權、梁武、李德裕之遺跡、余感之賦詩（以下略）（中華書局、一九八一年）

（22）孔明所坐石、狒狒非人刊。（『欒城集』上海古籍出版社、一九八七年）

（23）この間の事情に関しては、角谷聰氏「「三国志物語」における赤壁の戦いと甘露寺説話」（『中國中世文學研究』第四十五・四十六合併号、小尾郊一博士追悼特集、二〇〇四年）に詳しい。

（24）角谷聰氏、注23前掲論文、参照。

（25）蔡寛夫詩話云、潤州甘露寺有塊石、状如伏羊、形製略具、號很石。相傳孫權嘗據其上、與劉備論曹公。（『若渓漁隠叢話』

人民文学出版社、一九八一年）

（26）石羊巷在城南、呉時孫氏隧道也。劉備詣孫權、權與俱獵、因醉各據一石羊。（『施註蘇詩』巻四、並びに『蘇軾詩集合注』（上海古籍出版社、二〇〇一年））

（27）角谷聰氏は注23前掲論文で、施注は一二一三年の刊行であることから、ひとまず南宋の資料として扱うとしている。待考。

（28）角谷聰氏、注23前掲論文、参照。

（29）潤州甘露寺有三賢亭、乃劉備、曹操、孫權曾會於此。（「宋代筆記小説」二十一冊、河北教育出版社）

（30）自有此山川、於今幾太守、近世二千石、畢公宣化厚、丞相量納川、平陽氣衡斗、三賢若時雨、所至躋仁壽。（『全唐詩』巻四七五。『北固山志』巻九も引く）畢公とは畢構（『新唐書』巻一二八、『旧唐書』巻一〇〇）、丞相とは陸象先（『新唐書』巻一一六、『旧唐書』巻八八、）平陽とは斉澣（『新唐書』巻一二八、『旧唐書』巻一九〇中）を指す。

（31）小川環樹氏は羅隠の詩に関して、狠石を劉備と孫権に結びつける伝説は十世紀初にはすでに存在し、羅貫中は「狠」を「恨」にかえて十字紋の恨石という話を作り出したのだろう、と指摘する。（岩波文庫『完訳三国志（四）』訳注、一九八八年）

（32）『嘉定鎮江志』巻二は『輿地志』を引き、北固楼は蔡謨が駐屯したのが始まりであるとする。『北固山志』巻二は蔡謨の名を記す一方で、「北固山亭は山頂に在り、晋宋以前から已に有った」と記す。

（33）『宋詩紀事』巻一六・裴煜「多景楼」、『北固山志』巻二に見える。

（34）多景楼不知其所始、與所以名寺興於唐、緜李衛公以後登北固山題詠者、皆不及多景、則楼當建於本朝、無疑。獨不知其歳月、初為楼誰也。（『嘉定鎮江志』（「宋元地方志叢書」第五冊）巻一二「丹徒縣」。『北固山志』巻一二にも見える）

（35）多景楼在丹徒縣北固山上。宋太守陳天麟建。唐時臨江亭故址。（「四庫全書」）

（36）『宋詩紀事』巻四七。

（37）楊志玖氏「甘露尚未建寺　何来劉備招親―兼談孫劉聯姻」（『文史知識』、一九八四年六月）、参照。尚、顔尚文氏「後漢三國西晋時代佛教寺院之分布」（『歴史學報』第十三期、一九八五年）は、当時の寺院分布について詳細に述べているが、甘露寺の名は見えない。

（38）按圖志、寺建于三國甘露年間。至唐李德裕、割地以闢其址。（「宋元地方志叢書」第五冊）

(39)『方輿勝覧』巻一五、『明一統志』巻一一等。

(40)孫劉婚姻のプロットに関しては、楊志玖氏の注37前掲論文及び、王立言氏「橋国老和孫劉聯姻故事的衍変」(『貴州文史叢刊』、一九八六年一月)等、参照。

(41)呉主皓所作時改元甘露、因以為名。(「四庫全書」)

(42)在北固山上、呉甘露中建、因名。(「四庫全書」)

(43)査慎行『補注東坡編年詩』巻七引『旧経』。あるいは曹魏の甘露年間と混同したものであろうか。

(44)『欽定南巡盛典』巻八「甘露寺六韻」は、『明一統志』と『輿地紀勝』を並記する。また『北固山志』巻一三引、袁鑒「重修甘露寺記」は、孫皓と李徳裕の双方の説を並記しながら、「孫皓は建業に都して甘露と改元するも、一年足らずでまた武昌に都を移したのであり、それでは京口に寺を建てる暇もなかったであろう」と記す。

(45)沈伯俊・譚良嘯編著『三国志演義大事典』(潮出版社、一九九六年)は、『今楽考証』『笠翁批評旧戯目』には明・長嘯山人の伝奇「試剣記」の名が見えるが、既に散佚していること、また、祁彪佳『遠山堂曲品』に見える二種の「試剣記」のうち、どちらかがこの作品にあたるであろうことを記す。

(46)地理書に見える三国志関連の史跡の増減に関しては、土屋文子氏「三国人物遺跡初探—傳承土壌との關連において—」(『中國文學研究』第二十三期、一九九七年)、参照。

(47)拙稿「鍾山改名の由来について—蔣子文と孫鍾の伝説をめぐって」(『藝文研究』第八十五号、二〇〇三年)、参照。